

2023年5月21日(日) 日本基督教団仙川教会 主日礼拝

説教「本当に求めるべきもの」 聖書 アモス書5章4～6節 ルカ福音書11章1～13節

そこで、わたしは言うておく。『求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。』
(ルカによる福音書 11 章 9-10 節)

このみ言葉は、日本社会においても「求めよ、さらば与えられん」という文語訳で、世の人々に広く知られているものです。このみ言葉はそれを口ずさむ者たちに積極的に生きることを教え、励ましをあたえてきました。このみ言葉がそのように積極的な人生への招きの言葉として用いられてきたことには、ひとつの意味があるかもしれません。一方、このみ言葉が聖書の文脈を離れ、世の人々の心の中で一人歩きしてしまったことも事実です。この言葉は単なる人生訓ではありません。信仰によって正しく理解されるべき神の言葉です。

「求めよ、探せ、門をたたけ！」三つの命令形の言葉に漠然とした印象を持たれると思います。何故かと考えると、この文章には何を求めるか記されていないからです。一体、何を求めるのか。何を探すのか。どのような門をたたくのか。今、自分は何を求めているのか、という問いはとても大切です。自分が何を求めているかは、自分が今どういう生き方をしているかに深く結びついているからです。今の自分の願いにおいて自分の生き方がはっきりあらわれてきます。

結論を急ぐようですが、今日の聖書のみ言葉から二つのことを受けとめたいと思います。

第一に、この箇所の前半では、ある弟子が「わたしたちにも祈りを教えて下さい」と問い、主イエスが「このように祈りなさい」と教えて下さった祈りが記されます。そして、ひとつの譬え話をはさみ先ほどの「求めなさい」という主イエスの言葉が記されています。二～四節の主イエスが教えて下さった祈りは、代々の教会が継承し、私どもが日毎に祈っている「主の祈り」の原型です。この主の祈りを祈ること、「求めよ、探せ、門をたたけ」という言葉は深い関係があります。

第二に、最後に「このように、あなたがたは悪い者でありながらも、自分の子供には良い物を与えることを知っている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる。」(13節)と記されていることです。この御言葉からわかってくることがあります。「求めよ、探せ、門をたたけ」という主のみ言葉が漠然としていたのは、何を求めるのかが記されていないだけでなく、誰に求めるべきかが記されていなかったことに原因があったということです。しかし、ここにきて求めるべき相手は天の父だということがわかります。天の父は私たちに良いものを与えてくださるのです。そして、その天の父が求める者に与える良い者とは、聖霊であると、約束されています。聖霊とは神ご自身です。聖霊が与えられるとは、神様が聖霊として私たちの内に働いてくださるということです。

つまり、二つの大切なことをまとめて申し上げます。「求めよ、探せ、門をたたけ」という言葉が表している具体的な姿は、「主の祈り」に生きることであり、父なる神に聖霊を求めることになります。この二つは深く結びついていることであり、主の祈りを口ずさみつつ生きることは、聖霊の導きの中におかれることでもある。そのようにいってよいかと思えます。

ところで、先に「求めよ、さらば与えられん。」このみ言葉が世の中で一人歩きをしている現実があると申しました。人々は何を求めているかは問題とせず、誰に求めるべきかもわからないまま、身勝手な求めを正当化してしまうのです。そのことは祈るということにおいても同じです。人間は祈ることにしても身勝手さを発揮するのです。ルカ福音書11章の書き出しは、そのことをよく現しています。ある弟子が「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてくだ

さい。」と、主に問うています。考えてみれば、これは不思議な問いです。弟子たちがそれまでの生活の中で祈ることを知らなかったとは思えません。彼らは祈りの生活を重ねていたのです。それではなぜそのことを問わずにはおれなかったのか。そのヒントは冒頭の言葉にあります。「イエスはある所で祈っておられた。」(1節)つまり、弟子たちは、主イエスの祈りの姿に触れたのです。そして、そこに自分たちの祈りの姿とは異なる何かを感じ取ったのです。主イエスは私たちに祈りを教えてくださいました。教会は主イエスが教えてくださった祈りを「主の祈り」として継承しています。これは素晴らしいことです。教会にいらして間もないかたは、私はまだお祈りできませんと言わずに、主の祈りを祈りはじめてください。主の祈りを口ずさみはじめてください。そこに新しい祈りの世界がはじまります。

主の祈りのはじめは、「天にまします我らの父よ」です。私たちが神さまを「天の父よ」と呼ぶことができるということは素晴らしいことです。神さまを親しく父よと呼ぶことは、ユダヤ教時代から日常にあったわけではないのです。旧約聖書の中に神さまを「父」と呼ぶ言葉はありますが、それほど多いわけではない。主イエスが神さまを天の父と呼んだとき、ユダヤ教の人々は驚いたのです。そして、無礼だ、神を冒瀆している、と受けとめたのです。しかし、主イエスは神から遣わされた神の独り子であり、主イエスだけが真実に神さまを親しく「父よ」と呼ぶことのできるお方です。それだけに、私たちに神さまを「天にまします我らの父よ」と呼ぶことを教えてください、そのためにご自身の生命をかけて救いの御業を行って下さったことは、大きな恵みです。何を祈れなくても、神さまを、「天の父よ」「私の父よ」と呼びはじめるとき、神さまとの新しい関係がはじまっているのです。

私たちが、信仰において熱心に、求め、探し、門をたたき始める時に、わかってくることがあります。自分が求め、探し、門をたたき前に、神ご自身が自分を求め、探し、自分の心の扉をノックし続けておられるということです。主が待っていて下さるのです。そのことに気づくときに、私たちにそれに応えようとする決意があたえられます。その決意も私たち自身の思いを超えて、神に与えられたものです。それは聖霊なる神の導きであるということが出来ます。聖霊を求める祈り。それは神ご自身がお働きになることを期待し待つお祈りです。この祈りは、教会において第一の祈りとも呼ばれるものです。聖霊なる神の働きなくして礼拝はなりたちません。説教者の語る言葉が神の言葉として語られ聞かれるために聖霊なる神の働きが必要です。私たちが神さまを天の父よと呼べるようになることも、「イエスは主である」と告白できるようになることも聖霊なる神の働きによるのです。

本当に求めるべきもの。今日のメッセージの目指す先は、この教会が聖霊を求める祈りに満ち溢れることです。新来者、求道者の皆さんにもお勧めします。求道の生活はすでに祈り始める生活です。誰もが主の祈りをくちずさむことができます。聖霊の導きを祈り始めることができます。神さまとの対話が始まるのです。それは素晴らしい恵みの世界です。あなたが神さまに心を向けて祈り始めることを、神さまご自身が求めておられます。神さまは喜んであなたの祈りに何らかのかたちで答えてくださいます。それは自分の願ったとおりの神の応答ではないかもしれません。神さまは私たちに不要なことは不要なものとするので私たちの祈りに応えられます。神さまは私たち以上に私たちのことをご存じでられます。この神さまを信頼してよいのです。祈りは必ず聞かれます。私たちは、主の祈りを口ずさみ、聖霊を求める祈りにおいて、私たちは本当に何がなくてはならないかを知ることができるようになります。本当に求めるべきもの。今朝、それを神ご自身が私たちに深く悟らしめ、祝福の世界に導いて下さるように心から願います。